平成21年度　新発田市遺跡出土品展

平成22年2月16日[火]～2月21日[日]／新発田市立図書館　坪川記念室

主催：新発田市教育委員会

ごあいさつ

新発田市は、日本海の海岸線から飯豊連峰の山頂まで、高低差のある様々な地形がみられます。この広い範囲から多くの遺跡が発見されており、その数は680ヶ所にものぼります。

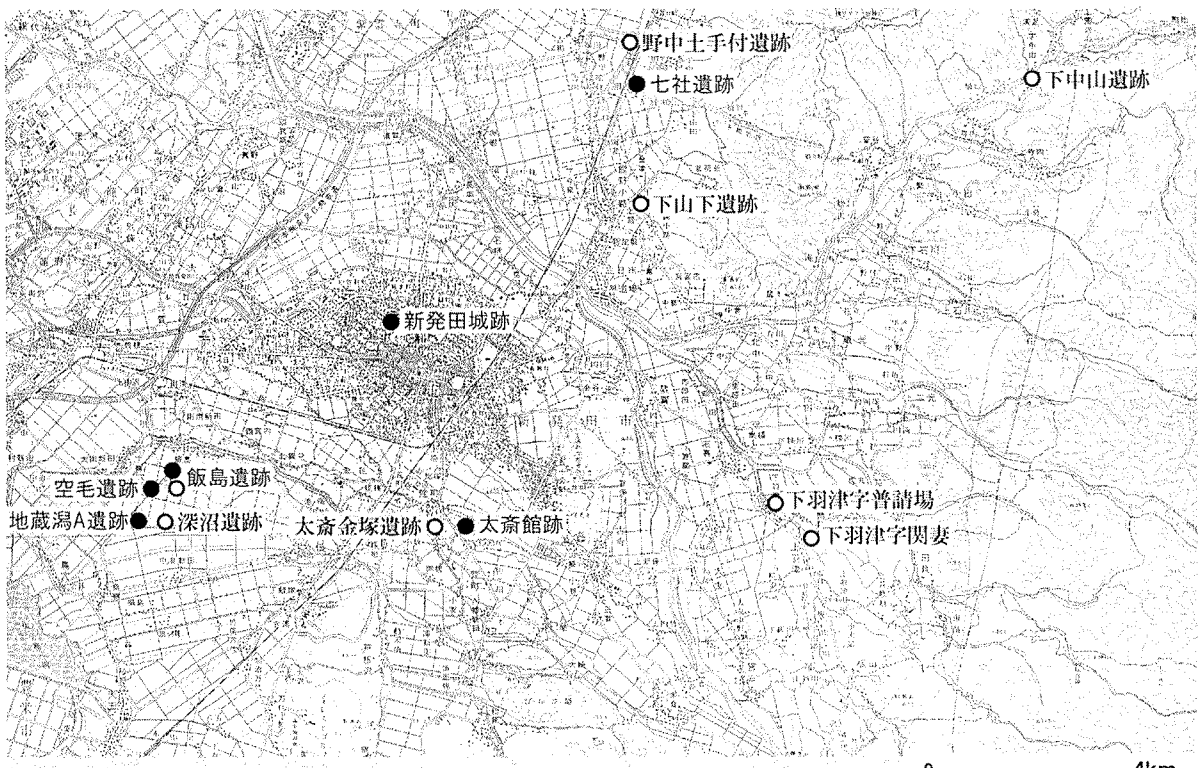
昭和42年以来実施している、開発事業に先立つ本格的な発掘調査は65ヵ所以上におよび、旧石器時代から江戸時代に至るさまざまな調査成果から、私たちの足元に埋もれていた新発田の歴史が徐々に明らかとなってきています。

このたび、新発田市教育委員会では、発掘調査の成果を広く市民のみなさまに公開するために、平成21年度に市内で発掘調査を行った地蔵潟A遺跡・空毛遺跡ほかの出土品を中心とした展示会を企画いたしました。限られた内容ではありますが、どうぞごゆっくりとご覧いただき、先人の足跡と悠久の歴史に思いをはせていただければ幸いです

■　平成21年度の遺跡発掘調査

【本発掘調査】　地蔵潟A遺跡（飯島・下中ノ目）／空毛遺跡（飯島）／太斎館跡（太斎）／飯島遺跡（飯島）七社遺跡（住田）／新発田城跡 第24地点

【試掘・確認調査】　下中山遺跡／下山下遺跡／野中土手付遺跡／深沼遺跡／飯島遺跡／太斎金塚遺跡／下羽津普請場地内／下羽津関妻地内



平成21年度に調査した主な遺跡　●：本発掘調査、○：試掘確認調査

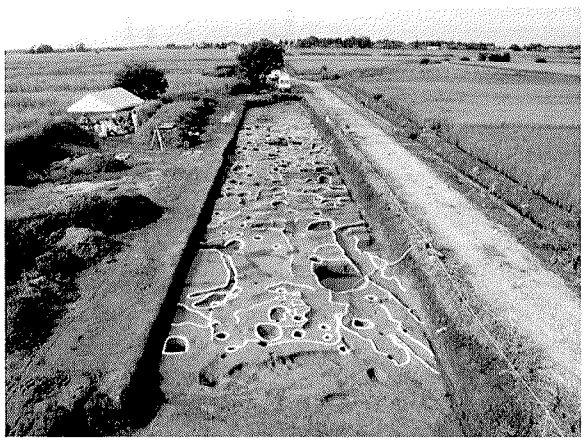
■ 空毛遺跡

所 在 地：新発田市飯島字空毛1410番地 ほか
調査原因：県営ほ場整備事業 佐々木南部郷2期地区
調査面積：630㎡
調査期間：平成21年6月15日～9月16日

○遺跡の概要

市の西部にあたる佐々木地区には低平な平野部が広がっています。現在では一面の水田地帯となっていますが、奈良時代から平安時代にかけての遺跡が数多く見つかっており、多くの集落が営まれていたと考えられます。

市教育委員会では、パイプラインの工事により失われる箇所についてのみ本発掘調査を実施しました。



調査区全景（南側調査区：南から）

○発掘調査の概要

調査区は、現在の排水路である「斜めの川」を境に北側の1区と南側の2区に分かれます。1区では主に平安時代の建物跡が、2区では古墳時代の集落や平安時代の建物跡、川の跡などが見つかりました。

＜古墳時代＞

古墳時代は前期・中期・後期に分けられますが、空毛遺跡は前期と後期の遺跡です。この時期の遺構では竪穴建物・井戸・溝・墓などが見つかっています。竪穴建物は後期のもので1辺2mほどと小規模ですが、壁際に巡らされた溝内に細い柱が規則正しく並んでおり、この柱の間に土壁を築いていたと考えられます。前期の遺構では、お墓の跡と考えられる穴が見つかりました。この穴は土の埋まり方から木の棺を入れていた可能性があると考えています。

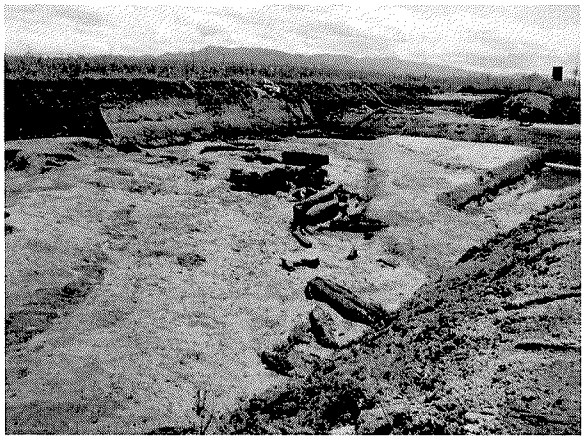
遺物では、甕・壺とともに器面をヘラで磨き炭素を吸着しさせて焼いた後期の黒色土器の坏が数多く出土しました。また、古式須恵器も少量見つかっています。

このほか注目すべきものとして、ネックレスなどに使われた玉類があります。コハク製の棗玉は1cmほどの大きさですが、古墳時代の集落遺跡としては県内初の資料となります。また、細長い管玉が2点出土しました。

＜奈良・平安時代＞

調査区のほぼ全域から遺物が出土しています。遺構は掘立柱建物、溝、川の跡などが見つかっています。掘立柱建物はほとんどが総柱と呼ばれる建て方のもので、倉庫として使われたと考えられます。これらは建物の向きが同じであり、倉庫群を構成していたものと考えています。

遺跡の南端からは川の跡が見つかりました。ここからは文字の書かれた墨書土器と一緒に木簡・斎串が出土しました。この木簡には「急々如□□」と書かれており、当時のまじないの文句である「急々如律令」と記されていたものと思われます。一緒に出土した斎串もまじないの道具であることから、これらは平安時代の水辺での祭祀の跡だといえるでしょう。



川跡の遺物出土状態

■ 地蔵潟A遺跡

所 在 地:新発田市下中ノ目字道下1940番地3 ほか
調査原因:県営ほ場整備事業 佐々木南部郷2期地区
調査面積:2,865㎡
調査期間:平成21年5月25日～9月28日

○遺跡の概要

地蔵潟A遺跡は、空毛遺跡と同様に佐々木地区から豊浦地区にかけての平地に立地します。かつて加治川の本流は現在の太田川であったと考えられており、周囲には小さな河川が多く流れていたようです。これらの河川により運ばれた土砂がたまってできた小高い場所に遺跡が作られました。

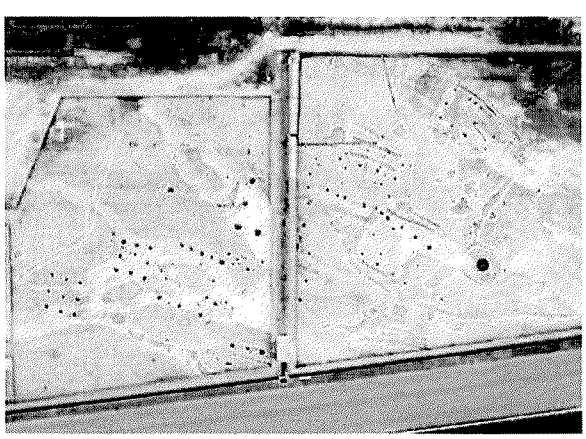
遺跡名となっている「地蔵潟」は現在の地名から取ったものですが、明治時代中頃の地形図には湿地状の範囲が描かれており、実際に潟があったものと思われます。

今回の調査は県営ほ場整備事業に先立つもので工事により失われる範囲についてのみ発掘調査を実施しました。

○発掘調査の概要

重機で表土を剥ぐと、当時の遺物が含まれる「遺物包含層」となります。その下の地山の上面で奈良時代から平安時代にかけての建物や井戸の跡、流路とその護岸施設などが見つかりました。

建物は10棟あり、いずれも規則的に地面に穴を掘り、そこに柱を立てて造られる「掘立柱建物」です。遺跡は平地式と考えられる2間×3間の建物と、高床式の倉庫と考えられる2間×2間の建物を中心に構成されています。これらの建物は北西－南東方向に平行または直交する向きに建てられていて、当時の地形に合わせて建物が造られていたことがわかりました。建物の柱の多くは、建物を壊す際に抜き取られたと考えられますが、地中に埋まっていた部分だけが残っているものもありました。その中には柱の先端を加工して、穴の中に打ち込んで柱を立てたと考えられるものも見られます。



調査区近景(上空から)

調査で見つかった遺物は、須恵器や土師器といった日用的な土器がほとんどですが、墨書土器や円面硯(陶製の硯)や木製の盤なども出ています。土器は遺跡の近隣で作られたと見られるものが多いのですが、赤く塗られた土師器高杯(この時期のものとしては県内で2例目の出土)のように、他地域から持ち込まれたものも出土しています。

岸辺の遺物出土状態

○まとめ

今回の発掘調査によって、本遺跡は奈良時代から平安時代(今から1,150年から1,250年前ごろ)の集落の跡であることがわかりました。過去の範囲確認調査などから本遺跡の中心は今回の調査区の北西側に広がると考えられますが、見つかった遺構分布からもみても今回の調査範囲は集落の東端部分だといえるでしょう。集落の中心から外れてはいますが、建物をはじめとする遺構はあまり重複せずに見つかっており、当時の集落の様子を知るうえで大変わかりやすく、貴重な事例だということができます。

■ 太斎館跡

所 在 地:新発田市太斎字舘ノ腰122番地 ほか
調査原因:県営ほ場整備事業　太斎地区
調査面積:984㎡
調査期間:平成21年5月25日～7月24日

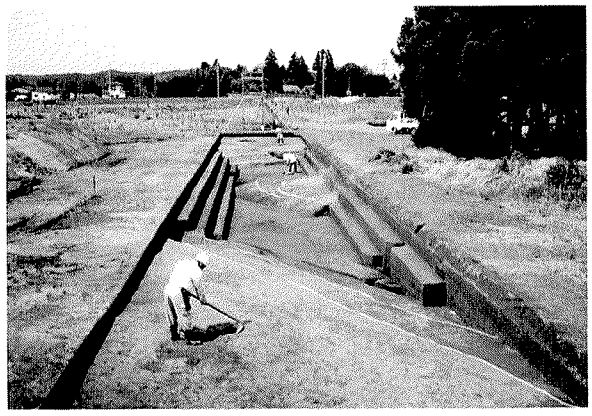
○遺跡の概要

太斎館跡は、五十公野山の南西方向、山王畑と呼ばれる微高地南側の水田地帯に位置します。室町時代にこの地域を治めていた武士の屋敷跡で、明治時代の地籍図から、周りの堀を含めて一辺75～90m、面積6,000㎡ほどの方形の館跡と推定できます。郭内と呼ばれる屋敷地部分は、周辺の水田に比べて高く、神社と畑地に利用されてきました。なお、調査地以外は、一部盛土して保存されることになりました。

○発掘調査の概要

調査区は、農道とパイプラインの工事部分であり、地籍図とほぼ同じ位置で堀を検出しました。堀の幅は12～18m、地表から底まで約2mあり、地下水がしみ出します。堀の郭内側は急傾斜ですが、外側は緩やかで、途中の段から傾斜が急になります。郭内は、調査範囲はわずかですが、掘立柱建物の柱穴が数本見つかりました。

堀の中からは、古瀬戸(愛知県)の碗・大皿・鉢・壺、能登半島の珠洲焼(石川県)や越前焼(福井県)の甕・壺・擂鉢、中国製の白磁や青磁の碗、天目茶碗、そして、茶葉を粉にする茶臼、茶釜をかける風炉、硯などが出土しました。いずれも破片ですが、今から600年くらい前の15世紀頃に作られた製品が主体です。



南東部の堀

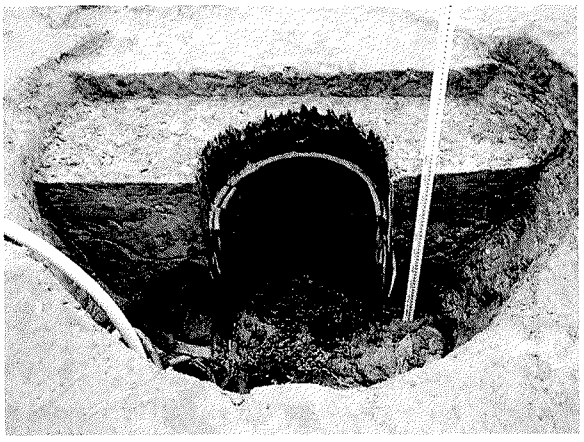
■ 新発田城跡　第24地点

所 在 地:新発田市大手町6丁目4－16
調査原因:陸上自衛隊新発田駐屯地内建物建設工事
調査面積:80㎡
調査期間:平成21年9月7日～10月6日

○発掘調査の概要

調査地点は、新発田城跡二ノ丸の西側にあたり、江戸時代の終わり頃に作られた絵図面では「御作事所」と記載されています。御作事所とは、大工などの作業場で、ここで城内に建てる建築物の用材を加工していたようです。狭い範囲の調査でしたが、当時の生活面が上層と下層に分かれて見つかりました。上層からは建物の柱穴や井戸が発見されました。井戸は周囲の土砂が崩落しないよう結桶が上下2段に重ねて据えられていました。下層からは溝や、方形の竪穴が発見されています。

出土遺物は、上層では江戸時代の後半から幕末頃の陶磁器・屋根瓦類が、下層からは戦国時代から江戸時代初めころの陶磁器類が見つかりました。



井戸の出土状態

平成21年度　新発田市遺跡出土品展
展 示 解 説

発行日:平成22年2月16日
編集・発行:新発田市教育委員会
〒959-2323
新潟県新発田市乙次281番地2
電話　0254-22-9534